

論文の概要及び審査結果の要旨

氏名（学籍番号）	: 竹中美香(7129504)
学位の種類	: 博士（教育学）
学位記番号	: 第2号
学位授与の要件	: 大阪総合保育大学学位規程第12条
学位授与の日付	: 平成27年3月15日
学位論文題目	: 乳幼児期のけんかやいざごに関する自我発達心理学的研究
論文審査委員	: 主査 守屋國光（大阪総合保育大学教授・博士(学術)） 副査 山崎高哉（大阪総合保育大学教授・博士(教育学)） 副査 大方美香（大阪総合保育大学教授・修士(教育学)）

[1] 論文の概要

乳幼児期のけんかやいざごは保育場面では日常的に見られる対人行動であり、子どもが健全な発達を遂げていく上での重要な体験となると考えられるが、近年の子どもを取り巻く社会環境の変化を反映して、それらは問題を引き起こす行動として対応されてしまうことが多く、そのために保育の実践でも研究でもその防止や介入の方法に主たる関心が向けられがちである。けんかやいざごは子どもの自我発達過程で重要な意義があり、子どもはけんかやいざごなど数々の衝突や摩擦を通して、様々な感情を体験し、対人行動のルールを学び、自己を統制する力を獲得していくなど、自立と自律に向けて健全な発達を遂げていくことができる。守屋（2010）は、子どもたちは信頼と期待のまなざしの中で伸び伸びと変動を繰り返しながら健全な発達を遂げていくことができるが、近年は時間と空間が限りなく狭められ、発達に伴う変動が次第に許容されなくなり、迷惑がられ、問題視されるようにさえなっていることを指摘して、こうした現代社会の在り方は、子どもたちの大人化を急がせるだけで、子どもたちの自我発達において深刻な問題であると警鐘を鳴らしている。本論文は、自我発達の観点から乳幼児期のけんかやいざごの重要性について多様な角度から検討を試みたものである。

本論文で終始問題とされているのは、乳幼児期のけんかやいざごの自我発達の意義は何かである。本論文は、以上の序論と以下の5章で構成されている。

第1章「乳幼児期のけんかやいざごに関する研究の動向」では、文献研究を通して、けんかといざごという用語の検討を行い、乳幼児期のけんかやいざごに関する従来の研

究を概観し、また、主要な発達検査の中に見られるけんかやいざごごに関連する項目を拾い上げて暦年齢別に整理し検討している。まず、けんかといざごごという用語の検討の結果から、「いざごご」は双方の意思や主張の食い違いによって起こる葛藤状態を指し、「けんか」はそれが攻撃行動として発展した行為であると定義している。次に、乳幼児期のけんかやいざごごに関する従来の研究の概観から、対人行動におけるけんかやいざごごがどのような観点から、どのような内容について、どのような方法で研究されてきたのかを明らかにしている。すなわち、これまでの研究を、①けんかやいざごごの方略に関する研究（発達的变化に関する研究、発生や終結のプロセスに関する研究）、②けんかやいざごごへの介入に関する研究、③その他の研究（けんかやいざごごの意義に関する研究、意識調査による研究など）に大別して検討し、次の諸点を明らかにしている。①では、発達的变化に関しては、2歳児までのけんかやいざごごの原因は物や所有に関するものが多く、3歳から4歳にかけて方略の変化が起こり、4歳から5歳頃には言語方略が増加し、自他の要求を踏まえて交渉ができるようになっていく傾向が明らかとなった。また、発生や終結のプロセスに関しては、けんかやいざごごの種類や発生や終結の仕方を分析し、カテゴリー化するなどの研究が多く、中でも所有をめぐるけんかやいざごごを扱った研究が目立ち、物の取り合いの場面に着目した研究が多く、所有をめぐるけんかやいざごごなどの対人行動が乳幼児期の自我発達に重要な役割を担っていることが明らかとなった。②では、誰がどのように介入するかが関心事であり、研究の方法としては介入の仕方の観察やインタビューなどが行われていることが明らかとなった。また、③では、けんかやいざごごの経験の意義を認め、ある程度子どもに任せて、子ども同士で解決することが望ましいと考えている研究者が少なくないことが明らかとなった。以上のように、これまでの研究は、けんかやいざごごの内容や種類を中心に論じているものが多く、その対象年齢も3歳児以上が多くを占め、2歳児以下を対象とした分析は少なく、自我発達の面から研究したものはほとんどないことが明らかとなった。また、介入の研究は多くあるが、けんかやいざごごに関する意識調査を行ったものは少ないことも明らかとなった。これらの検討結果から、乳幼児期に焦点を当ててけんかやいざごごに関する意識調査を行うことの意義と必要性を明らかにしている。さらに、本章では、主要な発達検査の中に見られるけんかやいざごごの関連項目を一覧表にまとめて、乳幼児期におけるけんかやいざごごの発達の重要性を明らかにしている。

第2章「乳幼児期の自我発達とけんかやいざごご」では、第1章で明らかにされた乳幼児期のけんかやいざごごに関する研究の動向を踏まえ、自我発達の観点から乳幼児期のけんかやいざごごがどのように論じられてきたのかについて検討している。まず、けんかやいざごごが自我発達に及ぼす影響を、文献研究を通して、①乳幼児期の自我発達に関する諸見解、②自我発達の観点から見たけんかやいざごごの発達の意義、の2点から検討している。①では、乳幼児期の自我発達に関する諸見解を概観し、守屋（1977）の自我発達の三次元モデルが、自我を生物的自己、社会的自己、時間的自己の三次元で捉え、誕生直後からの自我発達研究の開始を可能にしている点に着目している。②では、自我とけんかについての理論

的な見解はあるが、けんかやいざこごを自我発達の観点から捉えたものは少ないことが明らかとなった。これらの検討結果から、乳幼児期のけんかやいざこごを自我発達心理学的な立場から論じることの意義と必要性を明らかにしている。

次に、自我発達と所有をめぐるけんかやいざこごの関係を、①所有をめぐるけんかやいざこごの発達、②自我と所有意識の関係、③事例から見た所有をめぐるけんかやいざこごの意義、の3点から検討している。①と②は文献研究により、③は事例研究により検討が加えられている。①では、物をめぐる争いは生後9か月頃から見られ、所有をめぐるけんかやいざこごは年齢が低いほど多く見られることを明らかにしている。②では、所有することそれ自体に自我形成の芽生えを見出し、取り合うことに自我発達の重要な働きを認めることができると結論している。③では、保育園での観察を通して得た1歳児の事例から、子どものけんかやいざこごに多く見られるおもちゃの取り合いに着目して、所有をめぐるけんかやいざこごと自我発達の関係について検討し、所有をめぐるけんかやいざこごの意義についても考察している。これらを通して、けんかやいざこごなどの対人行動には自我が密接に関係しており、自我発達において重要な役割を担っていることを明らかにしている。このように、第2章では、乳幼児期のけんかやいざこごを自我発達心理学的な立場から研究することの意義と必要性を明確にし、本論文の立場と目的を改めて確認している。

第3章「大人の意識が子どものけんかやいざこごに及ぼす影響」では、第1章と第2章を通して明らかにされた乳幼児期におけるけんかやいざこごの重要性を踏まえつつ、子どもを取り巻く大人たちはけんかやいざこごをどのように捉えているのかについて、意識調査の結果から検討している。意識調査は、子どもの自我発達においてけんかやいざこごの体験は重要であるが、周囲の大人の価値観がその体験の量や質を左右する可能性があるのではないかの考えから、乳幼児期のけんかやいざこごについて、①保育を学ぶ学生の意識に関する調査、②保育者の意識に関する調査、③乳幼児期の子どもを持つ保護者の意識に関する調査、の3種類を実施している。調査対象者は、①では保育士養成大学に在学中の1～4年次生の大学生 446名（回収率 100.0%）、②では保育所・幼稚園・認定こども園に勤める保育者（保育士や幼稚園教諭）127名（回収率 51.0%）、③では保育所または幼稚園に子どもを通わせている保護者 391名（回収率 35.4%）である。

①の学生の意識調査では、ほとんどの学生は、乳幼児期のけんかやいざこごの経験は重要であると答えていたが、その対応に関しては不安や戸惑いが強いことが明らかとなった。けんか対応への困難さを感じる要因として、けんか場面への対応スキルが身につけていない、けんか後の子どもや保護者対応でどのようにしたらよいか分からないことへの不安や苦情に対する恐れなどが挙げられていた。②の保育者の意識調査では、けんかやいざこごの意義を認めた上で、対応の難しさを感じており、自由記述の中に保護者への説明をどのようにしたらよいか戸惑っている様子が窺われた。けんかした相手の子どもと遊ばせないでほしいとか、強い抗議を受けたり、説明を理解してもらえなかったという経験がある保育者も見られ、保護者対応のために子どものけんかを早めに止めてしまうといった影響が出ているこ

とが窺われた。子どものけんか後の保護者対応に困難さを感じる保育者は5割以上に上ったが、保育経験が長いほど、子どものけんかを止めることは少ないという傾向が窺われた。③の保護者の意識調査では、けんかやいざこざを肯定した上で「子どもたちの力で解決するのを見守ってほしい」と望む回答が多かったが、その対応に戸惑いを感じていることが明らかとなった。また、けんか後に保護者同士の関係性に難しさを感じた経験がある保護者が多いことも明らかになった。保護者の関係性に気を遣うあまり、けんかを制止したり、中にはわが子を悪者にしてその場を収めようとしたりしてしまうという記述も見られた。調査対象者の意識の差を分析したところ、けんかやいざこざの経験は重要かについては、保護者よりも学生や保育者の方が重要性を強く感じており、子どものけんかやいざこざの対応の難しさについては、保育者や保護者よりも学生の方が対応の難しさを感じていることが分かった。また、子どものけんかやいざこざ後の保護者対応の難しさについては、保育者や保護者よりも学生の方が強く感じていることが分かった。以上のように、三者の意識に差は見られたものの、学生・保育者・保護者のいずれもけんかやいざこざの重要性を強く認識しており、「どちらかといえば重要である」を含むと9割以上がけんかやいざこざは重要だと答えていた。しかし、けんかやいざこざの場面での対応については難しさを感じており、その影響が子どものけんかやいざこざの対応に影響を与えていることが明らかとなった。これらの結果は、子どもの自我発達過程において重要な対人行動が大人によって損なわれる可能性を示唆しており、現代社会における問題点を明らかにすることができたと結論している。

第4章「乳幼児期のけんかやいざこざを取り巻く環境」では、第3章の結論を受けて、各種の統計値を駆使しながら子どもを取り巻く環境の現状を探り、前章の意識調査で得られた自由記述の一部を紹介しながら、乳幼児期のけんかやいざこざを取り巻く環境と現代社会における問題点について検討している。我が国全体を見ると、単独での暮らしと核家族が増加し、三世代家族が減少し、さらにきょうだいの数も減っているなど家族の在り方が変化してきており、家族内での子どもを取り巻く大人の数も減っている上に、近所付き合いも減り、人との関係が希薄になってきていることが窺われる。また、最近の保育所建設への反対運動は、送迎時の立ち話や車・自転車の行き交いなどへの苦情も含まれているので、子どもの声にのみ反応しているとは言えないが、子どもの成長を見守り、育んでいこうとする大人が減少してきていることを示している。公園だけではなく幼稚園や保育園内でも静かに活動をしなくてはいけないことを子どもに強いるような社会が形成されつつある。さらに、現代は、昔と比べて子どもの遊び時間、遊び場、遊び方、遊び相手のすべてが変化している。遊び時間が短くなり、遊び場は狭まり、ゲームが介入するなど遊び方が変わり、遊び相手も多人数のタテの関係から、小人数のヨコの関係に狭まるなど、変化してきている。けんかやいざこざは子どもらしさを象徴する対人行動の一つと言えるが、当たり前のようにあった子どもらしさが発揮される場面は減少してきていると考えられる。友達やきょうだいと遊ぶ機会が減り、母親が遊び相手になっているという現状は、子どもの仲間関係が希薄になってきており、けんかやいざこざの経験も減ってきていることを示すものである。こうした諸

点から、子どもらしさを発揮できる場面を大人ができるだけ介入せずに見守るような環境を整えることが重要ではないだろうか、と結論している。さらに、「子宝」という言葉があるように、子どもは特別な存在として認められてきた経緯があるが、この言葉は死語になってきている感がある。共生社会の実現には価値観の多様性を認めていくことが重要であるが、子どもの存在を疎ましく感じる大人の価値観をも受け入れていくことが、本当の意味での共生社会と言えるのであろうか、とこれからの社会の在り方にも言及している。

第5章「けんかやいざござから見た乳幼児期の自我発達と養育の在り方」では、第1章から第4章までで明らかにしてきたことを踏まえ、けんかやいざござから見た乳幼児期の自我発達過程を考察し、そのことを踏まえた養育の在り方を提言している。先ず、第3章の保育者の意識調査の結果から、所有をめぐるけんかやいざござが現れる時期と内容を整理して、所有をめぐる対人行動の発達過程を図式的に描いている。それを根拠に、物の取り合いに至る自我関与の強まりを段階づけている。さらに、守屋(1977)の自我発達の三次元モデルの主要概念を用いながら、所有をめぐるけんかやいざござから見た乳幼児期の自我発達過程を、自我関与の強まりと自我関与の拡がりの二次元上で図示している。また、所有をめぐるけんかやいざござが自我発達を促すための大変重要な体験であることについて論考している。以上の自我発達過程についての検討を踏まえて、大人が子どもの自我発達に目を向け、理解し、寛容であることがいかに重要であるかを指摘し、子どもの自我発達を育むための養育の在り方についての提言を試みている。

最後に、今後の課題として以下の諸点を挙げている。本論文では、文献研究と行動観察と意識調査を通して多くのことが明らかとなった。しかしながら、意識調査については、回答中の自由記述の部分を今回は必要最低限しか取り上げることができなかった。今後さらに分析を継続して自由記述で書かれている内容の詳細な検討を試みたい。また、意識調査の対象は、保育を学ぶ学生、保育者、乳幼児期の子どもを持つ保護者であり、子どもに関心が強い人たちであった。今後は一般的な大人にまで対象を広げて調査を実施したい。さらに、けんかやいざござから見た乳幼児期の自我発達についての考察を深めていくために、愛着の発達と自閉症のこだわり行動の側面からも検討を試みたい。

[2] 審査結果の要旨

本論文は、文献研究と行動観察と意識調査という3種類の研究方法を駆使して、自我発達の観点から乳幼児期のけんかやいざござの重要性について検討を試みたものである。けんかやいざござは乳幼児期に限らず子どもが発達していく過程でよく見られる対人行動であるが、近年の子どもを取り巻く社会状況や教育風土を反映して、最近では保育や教育の実践でも研究でもそれらを問題行動として捉える傾向が強まってきており、その防止や介入の方法に主眼が置かれてきている。子どものけんかやいざござは、養育や保育、教育に携わる大

人の立場から見れば起こって欲しくないやっかいで重大視されがちな問題であるが、子どもの立場から考えれば日常的に起こっている意味のある重要視されるべき問題である。けんかやいざごは子どもの発達過程上では重要な意義があり、子どもは数々の衝突や摩擦を体験しながら自立し自律していく力、すなわち生きる力を身に付けていくと考えられる。本論文は、乳幼児期のけんかやいざごを現象面から対症療法的に問題視するのではなく意義や価値の面から自我発達の論究しようと試みた、大変意欲的で独創的な労作である。

本論文の意義は、第1に序論で明示されている研究上の観点にある。近年のわれわれの生活は確かに豊かになったが、その豊かさは物の豊かさであって心の豊かさではない。欲しい物がすぐに手に入るという物の豊かさの中で、養育でも保育でも教育でも、そこだけを取り出してきて問題視する学習的観点がますます優勢になり、長い時間の経過の中に位置付けて育ちを見守り支援する発達の観点は軽視されてきている。りんごが欲しければ買いに行けばよい。苗を植え、木を育て、りんごが実るのを待つ必要はない。このような、結果ばかりを求めて過程を考慮しないような風潮が強まっていく中で、本論文は終始、発達の観点から保育・教育の在り方を論じようと試みている。

第2に、自我発達という困難な課題に正面から挑戦しようという果敢な研究姿勢に意義がある。たとえば、人間とロボットを比較してみれば容易に理解されるように、われわれ人間には自我があるということは誰もが否定し得ないが、にもかかわらず、自我の存在は客観的には捉え難く、その研究は至難のわざである。したがって、自我発達を研究課題にすることは、扱い得るものを扱い論じ得るものを論じるという安易な研究姿勢では取り組むことはできず、扱い難いものを扱い論じ難いものを論じるという挑戦的な研究姿勢が求められる。本論文は、丹念な文献研究と丁寧な資料分析に基づき、この困難な課題に意欲的に取り組んでいる。これこそは学位論文に求められる重要な研究姿勢の一つである。

第3の意義は、多様な研究方法を駆使して十二分な研究資料を収集していることにある。本論文では、文献研究と行動観察と意識調査という3種類の研究方法を用い、また、意識調査では保育を学ぶ学生と保育者と保護者の3者について調査を実施して、自我発達の観点から乳幼児期のけんかやいざごの重要性について検討を試みている。これら3種類の研究方法並びに3者の意識調査の結果を、加算的・補完的に用いているだけでなく、乗算的・統合的に用いることによって、重厚で合理的で創造的な検討・考察がなされている。

第4に、微視的な検討から巨視的な検討まで段階的に論究を進めていることに意義が認められる。すなわち、乳幼児期のけんかやいざごの実態の検討から、その意義の検討を経て、けんかやいざごを取り巻く環境や社会の在り方の検討へと、検討の輪を広げていきながら論究を進めている。このような検討の進め方によって、本論文には明確な文脈と展開が認められ、説得力のある学位論文となっている。

第5の意義は、研究成果から自我発達のモデルの素描を試みることによって、開かれた研究にしている点である。研究におけるモデルには、研究の出発点としてのモデルと研究の到達点としてのモデルがあり、研究の到達点としてのモデルは次の研究の出発点としてのモ

デルになる、といったように螺旋状に研究は展開されていく。本論文では、最終章でそれまでの検討結果を集約して、所有をめぐるけんかやいざこざから見た乳幼児期の自我発達過程を自我関与の強まりと自我関与の拡がりの2次元上に図示し、子どもの自我発達を育むための養育の在り方についての提言を試みている。

本論文は、以上のように、実証的であり理論的に高く評価できる独創性を豊かに備えているが、今後さらなる研究の発展を期待して、問題点をいくつか指摘しておきたい。

第1に、自我の定義についてである。自我は極めて困難な研究テーマであり、自我の定義は多くの研究を積み重ねてようやく辿り着くことができる到達点かもしれない。本論文では文献研究を通していくつかの自我の定義を紹介しているが、今後研究を進めていきながら、論者自身の自我の定義を明確にしていく必要がある。

第2に、意識調査の結果得られた自由記述の活用についてである。意識調査で自由記述を求めると後の集計分析が大変困難であるがために、多くの研究者が自由記述による回答を避けたがる傾向があるが、自由記述は選択式の回答では得られない貴重な研究資料となり、新たな知見や発想につながる可能性に富んでいる。本論文では、自由記述を随所で活用しているが、まだまだ分析されていない自由記述が少なくない。言わば、食材がたくさんあるのに調理が追いついていないようであり、大変もったいない。本論文で紹介された意識調査の自由記述には自我発達の様相に関する記述もたくさん出てきていることを考えると、未処理の自由記述の今後の分析・検討を期待したい。

第3に、本論文では、たくさんの貴重な問題提起がなされているが、その具体的な取り組み方については示唆の段階に留まり、明確な提言にまでは至っていないものもある。本論文の研究目的を越えた課題かとは思いますが、今後検討を進めていく必要がある。

以上、審査委員により指摘された本論文の主たる問題点を列挙してみた。いずれも本論文の今後の課題を含めての指摘であり、これらの問題点は論者自身も口頭試問で指摘を受けて今後の課題であることを認め、また、本論文の最後で今後の課題として明記されているものも含まれているので、早晚解決されていくであろうし、課程博士論文としての価値を損なうものではない。見方によれば、これらの問題点は、本論文の豊饒さを示すものでもあり、今後の研究の更なる発展が大いに期待される。

よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい論文と認める。

